

ギリシヤでの記念行事を終えて 富山大学附属図書館 栗林 裕子

昨年七月、八雲没後一一〇年を記念してギリシヤで開催された関係行事に参加しました。

成田からアラブ首長国連邦のアブダビで飛行機を乗り換え、約二十時間かけてアテネへ到着しましたが、オリブの他に夾竹桃や合歡の花、南天、杉や松など、日本でも馴染みのある樹木が出迎えてくれて、初めて訪れる土地という緊張感から解放されました。

ギリシヤでの主な行事は二日間にわたる国際シンポジウム「The Open Mind of Lafcadio Hearn」とレフカダ市が開館するハーン記念室のオープン式典への参加、二〇〇八年ハーンをテーマに芸術作品を集めて企画展を開催したアテネアメリカカレッ

ジヤハーンゆかりの地への訪問です。ハーン記念室へは富山大学からヘルン文庫の蔵書で、「耳なし芳一」の原典と言われる『臥遊奇談』の複製を贈呈しました。

そして、ハーンに捧げるパフォーマンスとして、俳優の佐野史郎さんとギタリストの山本恭司さんによる「朗読の夕べ」がレフカダ島の野外ステージと母ローザが亡くなったコルフ島のアジア美術館内で行われ、さらに、熊本県の清和文楽による「雪女」も上演されましたが、これらの行事は、ギリシヤ国内の新聞でも取り上げられて、ハーンとギリシヤの関係を知る人が広がっているようでした。

ギリシヤ滞在中で印象深い場所は、

やはり、ハーンの生家とローザの亡くなったコルフ島の病院です。写真でしか見たことのなかったハーンの生家は一九四八年の地震で崩壊し、現在の家は建て替えられたものではありませんでしたが、家の前の港へ続く路地や、少し歩いたところにある町の中央広場は当時のままで、広場で遊ぶ親子に二歳で母と共にアイルランドへ渡るハーン親子の様子を思い起こさせるのに十分な空間でした。

ハーンが洗礼を受けたパレスケビ教会は内部の美しい装飾とともに洗礼の壺が中央におかれた様子は鮮やかに今も目に浮かびます。

生家近くの詩人公園と言われる場所には、ハーンの胸像が立てられ、その公園から海辺へ着いた頃はちよ

うど日が沈むころでしたが、その夕暮れは松江の宍道湖がレフカダ島の景色に似ていることを、実感させられました。

コルフ島の病院は現在、イオニア大学の敷地内にあります。昨年の一〇月まで患者さんがいたそうで、病院としての機能は別の場所へ移りましたが、移転先の病院の医師と看護師さんからお話を聞くことができました。患者が散歩した庭などは、樹木は大きくなっていますが、その頃のまま、森のようになった庭のベンチにはローザが腰かけているようです。

ローザは宗教熱中症であったと説明されましたが、敷地内にある教会へはよく通って、ここへ来ると気持ちが悪く落ち着いたそうです。この病院で十年間を過ごし、一八八二年に五十九歳で亡くなりますが、ニューヨークにいた三十二歳のハーンは知る由もなかったでしょう。教会の祭壇へ参加者全員でお花を供え、ローザの冥福を祈りました。

また、ギリシヤでのイベント全体を通しては、シンポジウムを初めとして、そのテーマのとおり、ハーンの偏見のない考え方、生き方を再認識する時間であったと感じています。

富山八雲会 ニューズレター

第18号

2015. 2. 10 発行



シンポジウム



レフカダ島の夕日



ローザが通った教会

ハーンの生家



ハーン胸像(詩人公園)

病院の庭